

寄稿

癌研究会名誉研究所長

菅 野 晴 夫

(元基礎生物学研究所評議員会会長)

岡崎の最初の印象は忘れ難い。乙川が中広くゆったり流れる静かな街の緑の丘に点在する煉瓦色の建物、内部も施設もデラックスで、アカデミックな雰囲気、都塵を離れた真理探求の地といった感じであった。19世紀の香りがして、ある種のアナクロニズムを感じさせるものがあった。研究所群ができて間もなくの頃の話である。

それからしばらくして、岡田節人所長のご依頼で評議員として基生研とおつき合いをすることになった。岡崎への道は豊橋で新幹線から名鉄に乗り換えなければならず意外に不便であった。以前、フランスのリオンにある国際癌研究機構の委員として何年かりオンに通ったことがある。その時間聞いたことであるが、国際研究所の立地条件として必要なものが3つある、国際空港、優れた大学そして int' school である。残念ながらリオンはこの条件を満たしていなかった。そして、ここ岡崎でもある。岡田さんの所長としての仕事は、この立地条件と無縁ではないと思われるアナクロニズムの漂うアカデミズムをどう近代化するかにあるように思われた。そしていま、振り返ってみると岡田さんはそれを立派に成し遂げられたと思う。

共同利用研として大型スペクトログラフがあり、大小無数の水槽がある、しかし、基生研が研究者にとって魅力的なのは、ここでは基礎生物学の今日的課題、発生、分化、光合成、環境適応、転写、細胞内情報伝達等々と正面から取り組んで次々といい仕事をしているということであろう。事実、基生研は優れた研究中心として世界に発信を続けてきた。このことは1992年の Science 誌の特集「日本の科学」の中で基生研が論文引用率で日本で1位、MIT などの国際的研究所と略同様のの記事をみれば多言を要しないであろう。基生研は、優れた研究者にその力を発揮できる条件を与えることができれば世界的成果が得られることを実証した。その条件とは、設備や研究費もあるだろうし、古き悪しき伝統がないこともあるだろうが、基生研が未完成の研究所で、教官の増員、部門や施設の充実等が計画的にプランされ実行されてきたことが大きかったのではないと思う。計画の実現それ自体の効用はもちろんであるが、立案した計画が実現可能という未来への希望が全員に活気を与え優れた研究を生み出すモトになったものと思う。

基生研の今後については、私は全く心配していない。これまでやってきたという自信が研究所に漲っているし、さらに大きい将来計画があり、それが活気となって生かされることは確かと思うからである。個人的な希望を述べれば、身のまわりの可愛い生物達をもよく研究して、新しい博物学をつくってもらいたい。また、生物の特徴は多様性にあるのだから biodiversity の研究を生き生きと展開してもらいたい。そのために、全国に分散し、どうかすると孤立している臨海実験所や植物実験所の活性化の中心となってもらいたい。そもそも基生研は、全国の生物学者が、動物とは何か、植物とは何かを知る研究拠点として設立されたものなのだから。